

そこは、^{せき}厳かな静寂に包まれていた。

人の気配はある。しかし、その者たちは、自らの息を潜め、周囲に気を遣い、物音を極力出さないように努め、自らの目的を果たすためにじっとしているか探索をしていた。そして、用が済めばその場から立ち去っていく。

時折、出入口近くで、ひそひそと会話が聞こえるが、長続きはしない。そんな空気が満ち溢れたことは――。

「返却日は来週金曜日までです。返却日を過ぎると貸し出し停止になるから、気をつけて下さいね」

「はい、ありがとうございます、図書委員ご苦労さま」

ここは、とある高校の図書館。物語はここから始まる。

「ねえ、いいでしょ」

業を煮やした女子は、いらだちながらつぶやき、強引に自らの顔を男子に近づけていく。腑に落ちない男子も女子の剣幕に圧倒され、なすがままに目を閉じ、女子を受け入れようとした。そして、お互いの吐息が触れ合う程に顔が近づいた時――。

「あなたたち、ここは図書館よ。そんなことするための場所じゃないわよ」

「――」

突然書架の背後から声が聞こえ、二人は反射的に身を離れた。そこには、少し厚めの本を持つばつんぽの女子生徒が立っていた。

「げ！ と、としよいきなり何よ！ そんなことって、なんか誤解してない？ 私たちは上にある本を取ろうとしていただけよ。ね！」

「え？ あ、そうそう」

女子から肘鉄を受けた男子はノリの悪い返事をおこせる。

「ここですか？ おまえ、やばいよ」

「大丈夫だって、ここなら死角になって誰からも見えないよ」

「でも……」

「もう、まじ根性ないね、雰囲気いいんだから――ね、ちよつとだけ。いいでしょ」

部屋の隅の背の高い書架で、男子生徒と女子生徒の影が辺りに気を遣いながらゆっくりと近づいていく。

ところが――、

「ねえ、どうしたの？」

「いや、なんでもない。でも……」

「でも？」

「なんか周りからものすごく見られているような気がするんだけど」

「そんな訳ないでしょ。ここは柱と書架との小さな隙間よ。自習室からは遠くて、受付からは見えない位置よ。もう、おじけつかないでよ！」

良い雰囲気の水を差し、いぶかしがる態度の男子に

「ふうーん、そうなんだ。本を取ろうとしていただけね」

「そうよ、あんた何か文句あるの？ ただの図書委員でしょ！」

開き直り気味の女子の返答に、としよ子と呼ばれた女子は、女子の背後の書架に視線を向けクスリと笑い、「でも、彼らはそうは言っていないわよ」

「え？ かれら……」

女子は、としよ子の視線の先の書架に向かって反射的に振り返った。すると――。

「えっ？ うそ！」

果たして、その書架に収められていた本全てが、その場にいた女子と男子に向かって放射線状に背表紙が傾いていた。

「これって――オレたちはこいつらに見られていたんじゃない……」

「そんな訳ないでしょ！ 本が勝手に動くわけじゃないん。どうせ、としよ子が何かしたのよ」